

論文

大学新生に対する英語アンケート調査分析
—学生はいつ英語が苦手になったのか—

石田 知美

日本福祉大学 全学教育センター

An analysis of a questionnaire survey for first-year students: When did they begin to have an aversion to English?

Tomomi ISHIDA

Inter-departmental Education Center, Nihon Fukushi University

Keywords : 英語教育, 新生, 授業改善, アンケート

English education, first-year university students, lesson improvement, questionnaire

Abstract

The present paper attempted to understand English learners' experiences by analyzing an online questionnaire survey of first-year students at Nihon Fukushi University. There were 89 responses in all. Participants were asked to answer the following questions: how they rated their English proficiency level, what areas of English they wanted to improve, whether they like using English or not, when they began not to like English (if they do not like it), what types of English lessons had made good or bad impressions, and what kinds of English lessons they hoped to receive at the university.

The results indicated that participants had little confidence in their English ability, and more than half reported not liking English. Approximately 70% of the participants from some department did not like learning English, and most stated that they found it difficult to learn English when they were in junior high school. The findings also revealed that "ease of understanding" is key, in terms of the good and bad lessons they had experienced.

要旨

本研究は、日本福祉大学の新生を対象に英語に関するアンケートを行い、彼らの英語力および英語教育に関する経験や要望を量的に分析することで傾向を把握し、授業改善に寄与することを目的とする。具体的には「英語力自己評価」、「英語力を伸ばしたい分野」、「英語学習に対する苦手意識」、「良い印象の授業」と「悪い印象の授業」および「大学英語教育に期待すること」についてオンラインアンケートを行い、89名の回答を分析した。その結果、全体的な傾向として、学生は英語に自信がなく、半数強の学生が英語を苦手としていることが浮き彫りになった。さらに、学部別に分析したところ、学部によっては約7割の学生が英語に苦手意識を持ち、英語につまずき始めたのは、主に中学1、2年生の時期であることが明らかになった。また、過去の英語授業を振り返った「よい印象の授業」及び「悪い印象の授業」に関しては、「わかりやすさ」が重要なポイントになっていることがわかった。

1. 目的と背景

近年、ほとんどの大学で学期末に英語学習に関するアンケートを授業評価という形で行っている。質問項目の平均点と学部の平均点の比較等を行い、個々の教員へフィードバックし、授業改善や大学組織全体の教育活動に役立てる目的で行われる。しかし、アンケート集計結果は、次年度や次学期に返却され、アンケートを行った学生の授業に彼らの意見や要望は反映されることはほとんどなく、教員による授業の質を高め、大学教育の改善を図るといふ本来の目的は果たせているとは言い難い(阿久津, 2014)。本研究では、新入生の初回の授業でアンケートを行い、大学の英語教育を受ける前の学生の状況を把握することで、授業後のアンケートとは異なった視点から授業改善に役立てることを目的とする。

宮田・石田・内田・鹿野・高橋(2019)及び宮田・鹿野・石田・岡部・内田(2004)では、大学の新生に対し英語に関するアンケートを行い、大学教育を受ける前の学生が英語に対し、どのような経験や要望を持っているかを調査した。彼らのアンケート調査では、学生は「話す力」及び「聞く力」を最も伸ばしたいと希望していることが明らかになった。さらに、「ネイティブ・スピーカーの授業」が最も高評価だったのに対し、学生のレベルや理解度を考慮しない「一方的な授業」が最も悪い印象を残したことがわかった。このアンケートから、英語を話したり聞いたりして英語を口頭で実際に使う学習を求める割合が多いが、授業を担当する教師の英語力不足や授業デザインの力不足があると悪い印象になってしまうことが示唆された。この結果から、教師自身の研鑽が重要であると結論付けられた。

新しい英語教育の変化は、学生の英語に関する考えに影響を及ぼす可能性がある。宮田他(2019)によれば、学生が良い印象を持った授業は、「ネイティブ・スピーカーの授業」、「ゲームや歌を取り入れた授業」及び「英語でやり取りする授業」であったが10年以上前に彼らが実施した同様の調査(宮田他, 2004)では、「英語でやり取りする授業」は高評価の授業には選ばれていなかった。これは、高等学校の学習指導要領が実施に移されたことにより授業は英語で行うという原則が反映され、教員と学生や学生同士の英語でのやり取りが増加したことが要因ではないかと推測された。悪い印象の授業についても、以前のアンケートでは「一方的な授業」、「和訳中心の授業」及び「配慮・資質に欠ける先生」に

よる授業が上位に挙げられていたが、宮田他(2019)のアンケートでは「和訳中心の授業」より「わかりにくい授業」の方が、悪い印象の授業の上位になっている。これも、近年英語教育においてインタラクションに重きを置いた学生中心の主体的な活動をする授業が増え、和訳中心の非活動的な授業が減ったためではないかと指摘された。時代の流れと共に英語教育の変化は、学生の英語に対する考えに少なからず影響すると言える。本調査は、この点を踏まえ、現在の英語に対する考えや要望を把握し、日本福祉大学(以下、本学)に適した英語教育の方向性についての手がかりとするものである。

2. 方法

2.1 調査参加者

本アンケートは、国際福祉開発学部2クラス、看護学部1クラス及び経済学部2クラスの初回授業で実施した。本学では大学独自の英語テストを基に習熟度別クラス編成を行っているが、本調査対象クラスはすべて下位クラスであった。教育的背景を統一するために留学生の在籍しているクラスは削除したため、国際福祉開発学部1クラス(12名)、看護学部1クラス(33名)、経済学部2クラス(44名)の計89名となった。本アンケート(2020年4月実施)に回答した学生は、2008年度告示の中学校学習指導要領に沿った英語教育を受け、中学校では英語の授業が週4時間になり、センター入試を受験していればリスニングテストを受けている。

2.2 調査方法及び内容

2020年度は、遠隔により初回授業を行ったため、アンケートはオンラインで実施した。学生は、大学のサイトにアップロードされたアンケート用紙(word文書)をダウンロードし、アンケートに回答した。本アンケートは任意とし、無記名で研究目的でしか用いないことを確認した上で回答してもらった。

アンケート内容は、宮田他(2019)を基に作成した。宮田他(2019)は、大学新生を対象に大規模にアンケートを行い、「英語力自己評価」、「英語力を伸ばしたい分野」、「良い印象の授業」と「悪い印象の授業」及び「大学における英語教育に対して望むこと」を調査した。本研究は、宮田他(2019)を発展させ、英語に対する苦手意識について設問項目を追加した。また、「良い印象の授業」と「悪い印象の授業」の設問につい

表1 「英語」に関するアンケート

1.	現在のあなたの英語力について、つぎの6つの分野において自己診断すると、5段階評価のどれにあたると思いますか。(数字省略)
2.	上の6分野のなかで自分の力を伸ばしたいと考えているのはどれですか(複数回答可)。また、その理由は何ですか。
3.	英語(英語学習)は好きですか、それとも苦手ですか。
4.	問3で(3)どちらかと言えば嫌い(4)嫌いと言えた人のみお答えください。いつ頃から嫌いになりましたか。
5.	自分がこれまでに受けてきた英語の授業のなかで、最も良い印象を持ったのは、どのような授業でしたか。(複数回答可・選択肢省略)
6.	自分がこれまでに受けてきた英語の授業のなかで、最も悪い印象を持ったのは、どのような授業でしたか。(複数回答可・選択肢省略)
7.	大学における英語の授業に対して望むこと、また、やってみたいことは何ですか。なるべく、具体的に書いてください。

ては、宮田他(2019)では、自由記述で回答させカテゴリー化しているが、本研究では宮田他(2019)で最も回答頻度の多かった上位10項目を一覧にして、学生に選択させる形式にした。これは、この設問の回答は多岐に渡り、著者のみで自由記述を分類すると、時間がかかる上に分類が困難な記述に対し客観性を保つことが難しくなり、カテゴリー化することに対する信頼性に問題が生じるのを避けるためである。表1は、実際のアンケートを示している。

3. 結果と考察

3.1 全体結果

設問1は、英語の6分野に関して英語力を自己評価させ、「まったくない」を1、「ないほう」を2、「ふつう」を3、「あるほう」を4、「十分にある」を5として得点化した。各分野の平均値及び標準偏差は、表2で示す通りである。本アンケートの結果、「読む力」が最も高く、「話す力」が最低点であることが明らかになった。この傾向は、宮田他(2019)と類似している。中学校・高校で最も自信がついたのは「読む力」であるが、大学では「話す力」を向上させたいということが見て取れる。本アンケート結果の特徴としては、「話す力」に次いで「文法知識」が低い評価であるという点があげられる。この傾向は、他大学のアンケートでは見られない。中学・高校の英語教育を通して少なくとも6年間は文法を学習しているはずであるが、学生には文法知識が足りていないという自覚があることが浮き彫りになっ

表2 英語力自己評価点の記述統計量

分野	自己評価点平均値(標準偏差)
聞く力	2.22 (.78)
話す力	2.01 (.80)
読む力	2.44 (.81)
書く力	2.22 (.75)
文法知識	2.16 (.70)
語彙力	2.21 (.75)
全体平均	2.21 (.77)

表3 力を伸ばしたい英語分野

分野	回答数(比率)
話す力	72 (49.0)
聞く力	39 (26.5)
語彙力	12 (8.2)
読む力	9 (6.1)
書く力	9 (6.1)
文法知識	6 (4.1)

た。また、宮田他(2019)では、自己評価平均値を基に2群に分け、平均値が高い上位群を「英語が得意」、低い下位群を「英語が不得意」として分類した。この基準に従えば、本アンケートの平均値2.21はやや低く、英語を不得意とするグループに属している。

表3は、力を伸ばしたい分野について、選択形式(複数回答可)で回答してもらった結果である。最も自己評価点の低い「話す力」が最も伸ばしたい英語分野となっており、この結果は宮田他(2004, 2019)と同様の傾向を示している。約半数の学生は「話す力」を伸ばしたいと思っており、約4人に1人は「聞く力」をつけたいと考えていることがわかる。

設問3は、学生の英語に対する苦手意識を調査し、英語に対して「好き」、「どちらかと言えば好き」、「どちらかと言えば嫌い」、「嫌い」及び「どちらとも言えない」の選択肢の中から、1つ選択する形式であった(図1)。28%は、「好き」または「どちらかと言えば好き」を選んでいる一方で、56%の学生が「どちらかと言えば嫌い」または「嫌い」と回答しており、半分以上の学生が英語に対して苦手意識があることが明らかになった。では、英語に対して「どちらかと言えば嫌い」または「嫌い」とネガティブな意見を持つ学生は、いつ頃から苦手意識を持ち始めたのだろうか。表4は、「どちらかと言えば嫌い」または「嫌い」と回答した学生が英語につまずき始めたと思われる時期を表している。約65%の学生が、中学校1, 2年の英語学習初期と思われる時期に、英語を嫌いになったと回答している。設問1

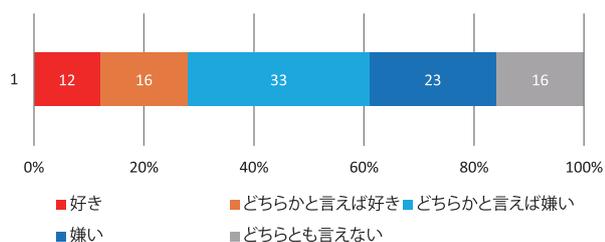


図1 英語に対する苦手意識

表4 英語が嫌いになった時期¹⁾

時期	回答数 (比率)
中学1年生	17 (36.1)
中学2年生	14 (29.8)
中学3年生	7 (14.9)
高校1年生	4 (8.5)
高校2年生	5 (10.6)
高校3年生	0

で「文法知識」の自己評価点が低いことと英語学習初期に英語を嫌いになり始めたことを勘案すると、基礎的な文法知識や語彙の段階で学習困難になり始めたことが示唆される。

設問5と6は、大学入学までの英語教育について最も「良い印象の授業」と「悪い印象の授業」について10の授業タイプから選択する形式の質問であった(表5)。大規模なアンケート調査を行った宮田他(2019)と比較して、本アンケートの結果が興味深いのは、良い印象の授業と悪い印象の授業ともに「わかりやすさ」というのが最も重要なキーワードとなっている点である。例えば、宮田他(2004, 2019)では、最も良い印象の授業は「ネイティブ・スピーカーの授業」であった。英語母語話者の生の発音や異文化について知ることのできるネイティブ・スピーカーの授業は、新鮮で楽しく高評価であった。「ネイティブ・スピーカーの授業」以外では、「ゲームや劇」や「英語の歌を取り入れた授業」など楽しくアクティブなタイプの授業が上位にあげられていた。しかし、本アンケートの結果では、「ネイティブ・スピーカーの授業」、「ゲームや劇」、「英語の歌」よりも「わかりやすい授業」の方が多く選択された。この差は、分析方法の違いに起因するとも考えられるが、本アンケートと同様の選択式の方法であった金川・三崎・川島(2006)も宮田他(2019)と類似した結果だったため、今回の差異が分析方法に起因しているとは考えにくい。

表5 良い印象の授業と悪い印象の授業

良い印象の授業タイプ	回答数 (比率)	悪い印象の授業タイプ	回答数 (比率)
わかりやすい授業	56 (27.3)	わかりにくい授業	46 (19.2)
ゲームや劇を取り入れた授業	29 (14.1)	配慮・資質に欠ける先生	43 (17.9)
ペアやグループで取り組む授業	25 (12.2)	一方的な授業	39 (16.3)
ビデオ(映像)を用いた授業	24 (11.7)	自分のレベルに合わない授業	33 (13.8)
英語の歌を取り入れた授業	18 (8.8)	何かをやらされる授業	27 (11.3)
文法や英作文の工夫された授業	16 (7.8)	教科書べったりの授業	14 (5.8)
ネイティブ・スピーカーの授業	14 (6.8)	暗記させられる授業	14 (5.8)
英語でやり取りする授業	12 (5.9)	力不足の先生	9 (3.8)
参加型の授業	7 (3.4)	文法の授業	8 (3.3)
音声重視の授業	4 (2.0)	和訳中心の授業	7 (2.9)

悪い印象の授業についても、宮田他(2019)や金川他(2006)とは異なる結果となっている。金川他(2006)で上位に挙がっていた「一方的な授業」と「配慮・資質に欠ける先生」は、本調査では「わかりにくい授業」よりも回答数は少ない。本アンケートの結果は、過去の英語教育を振り返って、わからない経験をした苦い思い出が強く反映されていると考えられる。

学生は、どのような授業を大学の英語教育に望むのだろうか。表6は、学生が自由記述で回答した授業タイプを、高橋(2004)を基に分類した結果を示している。最も回答数が多いのが「英会話ができるようになる英語授業」であり、これは設問2で最も「伸ばしたい英語分野」が「話す力」と「聞く力」ことであったことと密接に関連している。英会話ができるようになるためには、当然「話す力」と「聞く力」が必要であり、大学に入学し中学校・高校とは違った英語教育を求めていることがわかる。次に、回答数が高かったのは「わかりやすい授業」であったが、これも設問5と6の結果で顕著になった「わかりやすさ」が授業の印象に大きく関わることと関係している。学生にとって「わかりやすい授業」とは、具体的に教師の発音や説明がわかりやすい等の教師自身に関連する要因とテキストや学習内容がわかりやすい等の教材レベルの要因が関係する。「わかりやすい授業」を行うためには、教師は自身の英語力研鑽、教授法や教材の工夫が必要となる。また、設問7では

表6 学生の望む授業タイプ²

授業タイプ	合計 (比率)
英会話ができるように	18 (20.9)
わかりやすい授業	14 (16.3)
専門につながる学習	9 (10.5)
英語の歌を取り入れた授業	7 (8.1)
基礎・基本の学習	6 (7.0)
参加型の授業	5 (5.8)
楽しい授業	4 (4.7)
発音の学習	4 (4.7)
文法の学習	4 (4.7)
実用的な使える英語	3 (3.5)
ネイティブ・スピーカーと関わる授業・体験	2 (2.3)
リスニングの授業	1 (1.2)
資格試験に役立つ授業	1 (1.2)
リーディングの授業	1 (1.2)
ペア・グループの授業	1 (1.2)
その他	6 (7.0)

「わかりやすさ」に関連した次のような要望も見られた。「高校時代に特にそうだったのですが、授業の初めから終わりまで説明から何まですべて英語だったので、自分が今何に迷っているのか、何がわからないのか、それすら自分で理解できていないことが多々あったので、少しでもいいので初めの方は日本語を交えての授業をお願いしたいと思っています」近年、All Englishの授業が増えてきており、授業中の英語のインプット量が増えるのはいいのだが、学生の理解度を加味せず導入すると、学生は理解できず大いに混乱する。教師は学生の理解度やわかりやすさを重視しながら、英語のインプットを増やす工夫が求められる。

3.2 学部別結果

英語に対する考えや要望は、学部によって異なることが予想される。表7は、学部別の英語自己評価点をまとめている。アンケート調査全体の結果では、先行研究と比較しても「文法知識」の自己評価点が低いと指摘したが、その要因となっているのが、経済学部の自己評価点の低さにあることがわかる。国際福祉開発学部では、「文法知識」は「読む力」に次いで高い一方で、経済学部は「話す力」に次いで「文法知識」が低い。経済学部は、平均点も他学部と比べて低いが、特に「文法知識」のなさを痛感していることが特徴である。

設問2の伸ばしたい英語分野については、学部による違いはあまりなく、どの学部の学生も「話す力」と

表7 学部別英語力自己評価点の記述統計量 (自己評価点平均値, 標準偏差)

分野	国際福祉開発学部	看護学部	経済学部
聞く力	2.33 (.78)	2.30 (.77)	2.14 (.80)
話す力	2.17 (.83)	2.18 (.85)	1.84 (.75)
読む力	2.67 (.78)	2.67 (.85)	2.20 (.73)
書く力	2.17 (.72)	2.52 (.67)	2.02 (.76)
文法知識	2.25 (.87)	2.42 (.61)	1.93 (.64)
語彙力	2.50 (.80)	2.33 (.65)	2.05 (.78)
全体平均	2.35 (.79)	2.40 (.75)	2.03 (.75)

表8 学部別力を伸ばしたい英語分野 (回答数, 比率)

伸ばしたい分野	国際福祉開発学部	看護学部	経済学部
聞く力	9 (37.5)	14 (25.5)	16 (23.5)
話す力	8 (33.3)	28 (50.9)	36 (52.9)
読む力	1 (4.2)	4 (7.3)	4 (5.9)
書く力	2 (8.3)	3 (5.5)	4 (5.9)
文法知識	1 (4.2)	2 (3.6)	3 (4.4)
語彙力	3 (12.5)	4 (7.3)	5 (7.4)

「聞く力」を伸ばすことを希望している (表8)。その理由として、例えば、看護学部のアンケートでは、「将来看護師になった時、外国人の患者とコミュニケーションを取るのに最も必要であるから」といった、自分の将来の職業に直結した現実的な理由が挙げられた。

英語に対する苦手意識は、学部によって大きく異なる結果となった (図2)。国際福祉開発学部では73%の回答が「好き」または「どちらかと言えば好き」を選んでいるが、経済学部では69%の学生が「嫌い」または「どちらかと言えば嫌い」と答えている。国際福祉開発学部は、異文化理解を通して多文化共生社会について学ぶ学科であり、英語学習に重きを置いている。この学部の学生は、英語力の自己評価点は決して高くないため自信はないものの、英語は好きであるという傾向が見て取れる。

英語に苦手意識を持ち始めた時期も、学部別に見ると差異がある (表9)。例えば、文法知識に対する自己評価点が低く、英語に対して苦手意識を持つ学生が多い経済学部は、英語学習初期段階でつまづき始めているケースが多い。近年、コミュニケーションを重視した授業やtask-based ラーニングが英語教育で導入されることが多いが、経済学部のような学部のクラスでは、基礎文法や語彙にも重きを置いた学習が不可欠であることがわかる。看護学部については、学習初期に苦手になり始めたケースもあるが、文法や語彙のレベルが高くなる高校生になって嫌いになるケースも同程度見られる。

設問5の「良い印象の授業」は、どの学部も「わ

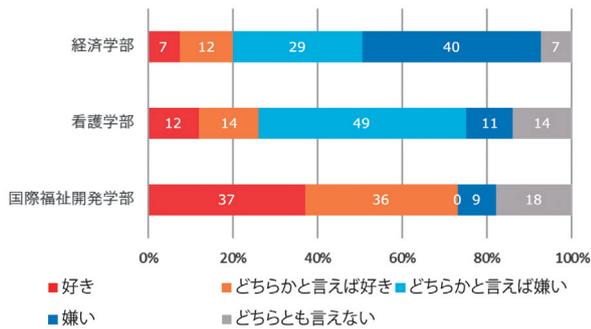


図2 学部別英語に対する苦手意識

表9 英語が嫌いになった時期 (回答数, 比率)

時期	国際福祉開発学部	看護学部	経済学部
中学1年生	0	5 (27.8)	12 (42.9)
中学2年生	0	4 (22.2)	10 (35.7)
中学3年生	1 (100.0)	2 (11.1)	4 (14.3)
高校1年生	0	2 (11.1)	2 (7.1)
高校2年生	0	5 (27.8)	0
高校3年生	0	0	0

表10 良い印象の授業 (回答数, 比率)

授業タイプ	国際福祉開発学部	看護学部	経済学部
わかりやすい授業	8 (25.0)	22 (24.4)	26 (31.3)
ゲームや劇を取り入れた授業	2 (6.3)	11 (12.2)	16 (19.3)
ペアやグループで取り組む授業	6 (18.8)	13 (14.4)	6 (7.2)
ビデオ(映像)を用いた授業	6 (18.8)	8 (8.9)	10 (12.0)
英語の歌を取り入れた授業	1 (3.1)	7 (7.8)	10 (12.0)
文法や英作文の工夫された授業	2 (6.3)	8 (8.9)	6 (7.2)
ネイティブ・スピーカーの授業	4 (12.5)	7 (7.8)	3 (3.6)
英語でやり取りする授業	3 (9.4)	6 (6.7)	3 (3.6)
参加型の授業	0	5 (5.6)	2 (2.4)
音声重視の授業	0	3 (3.3)	1 (1.2)

「わかりやすい授業」が最多という結果になっている(表10)。この傾向は宮田他(2019)や金川他(2006)とは異なり、本アンケートの特徴と言える。苦手意識を持つ学生がほとんどいない国際福祉開発学部では、英語でペアやグループでのインタラクションが多い授業タイプやビデオ(映像)を取り入れた授業タイプも高評価であった。

表11 悪い印象の授業 (回答数, 比率)

授業タイプ	国際福祉開発学部	看護学部	経済学部
わかりにくい授業	7 (15.9)	18 (19.4)	21 (20.4)
配慮・資質に欠ける先生	8 (18.2)	19 (20.4)	16 (15.5)
一方的な授業	11 (25.0)	12 (12.9)	16 (15.5)
自分のレベルに合わない授業	3 (6.8)	15 (26.1)	15 (14.6)
何かをやらされる授業	3 (6.8)	9 (9.7)	15 (14.6)
教科書べったりの授業	5 (11.4)	6 (6.5)	3 (2.9)
暗記させられる授業	2 (4.5)	4 (4.3)	8 (7.8)
力不足の先生	2 (4.5)	4 (4.3)	3 (2.9)
文法の授業	2 (4.5)	2 (2.1)	4 (3.9)
和訳中心の授業	1 (2.3)	4 (4.3)	2 (1.9)

表12 学部別学生の望む授業タイプ (回答数, 比率)

	授業タイプ	国際福祉開発学部	看護学部	経済学部
1	英会話ができるように	4 (28.6)	5 (16.7)	9 (21.4)
2	わかりやすい授業	5 (35.7)	4 (13.3)	5 (11.9)
3	専門につながる学習	0	9 (30.0)	0
4	英語の歌を取り入れた授業	0	1 (3.3)	6 (14.3)
5	基礎・基本の学習	1 (7.1)	3 (10.0)	2 (4.8)
6	その他	0	2 (6.7)	4 (9.5)
7	参加型の授業	0	2 (6.7)	3 (7.1)
8	楽しい授業	1 (7.1)	1 (3.3)	2 (4.8)
9	発音の学習	1 (7.1)	1 (3.3)	2 (4.8)
10	文法の学習	2 (14.3)	0	2 (4.8)
11	実用的な使える英語	0	1 (3.3)	2 (4.8)
12	ネイティブ・スピーカーと関わる授業・体験	0	0	2 (4.8)
13	リスニングの授業	0	1 (3.3)	0
14	資格試験に役立つ授業	0	0	1 (2.4)
15	リーディングの授業	0	0	1 (2.4)
16	ペア・グループの授業	0	0	1 (2.4)

設問6の「悪い印象の授業」については、学部別に結果が異なった(表11)。苦手意識の強い学生の多い経済学部では、「わかりにくい授業」が最も回答数が多かったが、国際福祉開発学部では「一方的な授業」が最も多い結果となった。設問5と6の結果を勘案すると、授業に対して「わかりやすさ」がポイントになっており、特に苦手意識の強い学生の多い学部については、歌やゲームを取り入れたり英語のやり取りの多いアクティブ・ラーニングより「わかりやすい授業」が好印象を残した。

設問7を学部別に分析すると、学部によってニーズが異なることが読み取れる(表12)。例えば、看護学部は、他学部のように「英会話ができるように」になりたい学生も多いが、それよりも看護・医療英語に関連した授業タイプを望んでいる学生が多いことがわかる。単に、日常的な英会話ができるようになるということだけでなく、将来、医療現場に出たときに役立つ専門的な語彙・表現を学習したいことが読み取れる。

4. まとめと今後の課題

「本学の学生は英語が苦手である」というセリフは、英語教員の間でよく耳にする。しかし、それが本当なのか、苦手意識を持っているとしても、どの程度なのか明らかにされてこなかった。本調査は、アンケート調査を通して量的に分析し、本学学生の英語に関する状況を明確に把握することを目的とした。本研究の結果から、大学入学時における学生の英語に関する状況の一部が明らかになった。本調査の結果として、以下の3点に集約できる。

- 1) 英語力自己評価点に関しては、全体として平均が低く、英語に自信がないことが明らかになった。特に経済学部で「文法知識」に対し低い結果となった。伸ばしたい英語分野としては、全学部で「話す力」及び「聞く力」をつけることを望んでいることがわかった。
- 2) 英語に対する苦手意識は、学部によって大きな隔りがあることがわかった。具体的には、経済学部は苦手意識を持つ学生が多い一方、国際福祉開発学部ではほとんど皆無であった。
- 3) 「良い印象の授業」については、「わかりやすい授業」がどの学部においても最も高評価であった。

「悪い印象の授業」については、学部によって異なる結果となり、英語の苦手な学生が多数の学部においては、「わかりにくい授業」が最も回答数が多かった。

上記の結果を鑑みて、本学の英語教育においては、リスニングやスピーキング活動を取り入れつつ、基礎的な文法や語彙力を考慮した授業をわかりやすく展開していくことが重要であることが示された。

さらに、今後の本研究を発展させるために、以下の点を改善する必要があると考える。

- 1) 学部ごとの回答数にばらつきが大きく、学部別の回答数に偏りがあった。今後はアンケートの回答数を増やし、よりの確に学生の状況を把握する必要がある。
- 2) 本研究ではテキストマイニングや因子分析等の統計処理を行っていない。今後は、統計処理を行うことによってより鮮明に学生の状況を把握することができる。

参考文献

- 阿久津 洋巳(2014)「授業評価アンケートは何を評価しているのか」『岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要』13, 245-252.
- 金川由紀・三崎リン・川島紀美(2006)「学生のニーズに答える英語授業の構築を目指して：英語授業アンケートから見る英語授業への要望」『平安女学院大学研究紀要』6, 97-107.
- 高橋妙子(2004)「学生たちは授業に何を期待しているか—アンケートから」『英語教育』53(6), 28-29.
- 宮田学・石田知美・内田政一・鹿野緑・高橋妙子(2019)「生徒がつけた英語の通信簿—新入生に対する新旧調査結果から—」『中京大学教師教育論叢』8, 63-88.
- 宮田学・鹿野緑・石田知美・岡部純子・内田政一(2004)「生徒がつけた英語の通信簿」『英語教育』53(8), 58-65.

注

- 1 具体的な時期を明記せず「中学校」としか記入しなかった3回答(国際福祉開発学部1回答, 経済学部2回答)は、ここでは分析対象から外した。
- 2 空欄であったり、「特になし」と書いた回答は分析対象から外した。